

「フツ、フツ、フツ。」

「何がフツ／＼や。借せ。ケツタイな奴やな。源やんこれか。オイ待ちいな。一遍讀まして呉れ、ナニひとつ、てんはつ、きしやうもんのこと。甚い肩の凝る書き様やなア。——わたくし。ねんあきさふらへは、オイ喜イ公、候やみな本字で書いて貰へ。やゝこしいてどもならん。あた……。あたま、とふふ、あたまとふふ。源やんこれなんや。」

「サア、あなたさまとふうふや相なが、あなたなの字とふうふのうの字がぬけてるのや。」

「フ、フ、フ、人間がぬけてよる依てに、貰ふた起請の文句までぬけてるのか。ふうふのやくそくいたしさふらふところ、じつしやうなり……。いよ／＼けんびさが肩こし相な。文句は解つてる。名宛は……下駄屋喜六さま。オイ喜イ公さま付けやな。色男。一べん鼻かめ。色男が鼻を垂れたりする。ない。何處の妓や。備前屋店、小照事本名たね。本名付きやな。おたねと云ふねな。ヤレおたねはんおたねはん。備前屋店小照事本名たね……。エエ……備前屋。オイ喜イ公。」

「えゝ。」

「この備前屋と云ふのは難波新地の備前屋と違ふか。」

「そや。」

「この小照と云ふのは年の頃二十二三の。」

「そや。源やんと一緒や。」

「何が源やんと一緒や。元堺の新地に居た。」

「そや。源やんと一緒。」

「去年の暮こつちへ來た。」

「源やんと一緒。」

「あんな事ばかり云ふてくさる。笑ふとゑくぼの入る。」

「ちよつとも違えへん。源やんとおんなし事や。」

「あの小照か。」

「そや。源やん、また一枚出そうなで。」

「そんな事云ふない。」

「指物屋清八さま。備前屋店小照事本名たね……。」（起請を持つて震へる。）

「あなたはん誰方のお下りだす。」

「喜イ公そんな事を云ふない。オイ……清八や。チョツと待ち。あぶない……オイ清八や。」

「源やん放して。」

「オイ。チョツと待ち、オイ喜イ公お前が爲にこんな騒動が出來てるねがな。」